

思春期の蒼さ

橋本昂祈

Akinori Hashimoto

目次

第一部 不器用な牙

ポケベル	3
思春期の蒼さ	7

第二部 僕を創った人たち

レバニラ定食	15
蒲田中学卓球部	19

第三部 グラードションの世界へ

はじめてビーズに触れた日	26
泣きぼくろ	28
ファーストクラス	30
あとがき	34

第一部 不器用な牙

ポケベル

今の若い子たちはポケベルを知っているだろうか。

ポケベルは、1990年代に登場した小型通信機器。当初は、短い数字しか送信出来なかった。

当然、受信専用である。

どうやって使うのかと言えば、4649（よろしく）や0840（おはよう）、114106（あいしてる）など、お互いが認識できる暗号を送って楽しむためにポケベルはあった。

あえて、解らない数字の羅列を友達に送って、翌日の学校で「どういう意味だったの？」と種明かしするような楽しみ方もあった。

日本国内で爆発的にヒットしたのはドラマや歌謡曲の影響が大きいらしい。

「ポケベルが鳴らなくて」というタイトルの曲もある。

ちなみに、覚えている限りでは、僕たちが中学2年生から3年生頃にポケベルが普及しはじめた。

けど、月額使用料が約5000円ほどしたために、一部のお金持ちの子供しかポケベルを持っていなかった。

だから、高校生になってアルバイトできるようになったらポケベルを持つのが細やかな夢だった。

もしも、僕が私立中学校に通わせて貰えるくらい裕福な家柄に育っていたら、自分だけでなく、周囲の友達もみんなポケベルを持っていたに違いない。

中学生がポケベルを持つというのは、一種のステータスなのだ。

スクールカーストについては、また別の機会に書こうと思うが、地元の公立中学校では、数えるくらいしかポケベルを持っていなかった。なので、ポケベルを持っていること自体すでに、スクールカースト

上位確定である。

話は脱線するが、運動会の待機時間（女子が着替えてる間）に、生徒たちから面白いと評判の先生が「人生でいちばん高い買い物は？」という話題を提供してくれて、男子全員で盛り上がっていた。

その際に、「ドラムセット」と答えた友人がいて、みんなで「スゲーー!」とか「幾らしたんだよ?」って感じで、一躍スクールカーストのスターダムに駆け上がった子がいた。

ドラムセット本体だけでも、約20万円以上したって発言でさらに盛り上がった。しかし、ドラムセットを置ける家があること自体がスゲーよなって、サラリーマン同士の悲哀みたいな話になったよ。

まあ、最終的には「このクラスでいちばん人気の女子を決めよう!」ってノリになってさ。

小学生の頃の人気投票と違うのは、そこに「お金」とか「頭の良さ」だとか、「おっばいが大きい」からとかゆくしょーもない付加価値が加わること。

（女子がいない時間の男子たちのオフレコの馬鹿話って、ホント平和でいいよなあ〜）

あ、それでポケベルの話だが、

男子たちの間で3番目くらいに人気あった女子がいたのだがその女子はポケベルを持っていたのですよ。

お金持ち、胸も大きい、顔もまあ可愛い。

頭の良さだけは誰も知る由が無かったが、ダンス部に所属するような垢抜けた女子だったことには違いない。

（僕らの時代はダンスは必修ではなかったから）

中学生の頃は、恋に恋するような時代。

当然、僕だっという人がいたら「付き合ってみようかなあ〜」なんて周囲に公言してた。

まあ、僕のことを「好きらしいよ」って噂があった女子がいたのだが、申し訳ないけど、小学生の頃を知ってるから、お友達としかみれなかったよ。

別にさ。小学生の頃から知ってるから、女としてみれないってだけで、その子に魅力がないわけじゃないからね。（実際のところ、けっこう人気の女子だったようだ）

人間というのは、近すぎると逃げたくなる生き物ですね。自分にはない物や才能を持ってるって魅力に感じます。

それで、ポケベルを持ってるようなハイスベック（？）女子とだったら、なんかよく解らないけど「付き合ったら楽しそうだよな」って思ったりした。

どうにかポケベル女子と仲良くなりたくて、話すきっかけを探ってみたりしたのだが、どうやらポケベル女子は、「エヴァンゲリオン」や「スレイヤーズ」などが大好きな生粋のアニオタってことが発覚したのだった。

大人になった今でこそ、アニメの素晴らしさをよく知ってるけど、当時の若者の間では、アニオタには市民権などなかったに等しいくらいオタクという生き物は勘違いされてたし毛嫌いされていた属性の人たちだったのです。

マンガはみんな普通に読むけどアニオタはなぜか迫害されるって、今から考えればおかしな話ですが。

そして、ポケベル女子の方だって、僕のような勉強もスポーツも話も面白くない中途半端な男子は、眼中になかったに違いない。

案の定、ポケベル女子はクラスのイケメン一軍男子と良い仲になってお付き合いしていたようだ。

（一軍とかいう言葉もあんまり好きではないが）

恋でもない。ましてや愛なんかでは絶対ない。

でも。なんだろう。この心に巢食う僅かな嫉妬心は。名もなき感情の正体は。

現代社会では、LINEやインスタのDMなどで気軽にメッセージできるようになり、「好きです」って言うハードルが低くなっているような気がする。

ポケベルが流行したような時代には、インターネットは高値の華だったし、携帯電話も一部の大人しか持ってなかった。

連絡手段といえは、自宅の固定電話にかけるか、手紙を出すくらいしかなかったような気がする。

そんな不便な時代に青春時代を過ごし、テレビゲームやテクノロジーの進化と共に歩んできた。

僕が今の時代にポケベル女子と出逢っていたら、インスタのIDを交換して仲良くなっていただろうか。

でも、恐らくは羨望と嫉妬心が交差してしまい、距離感も間違えて、相手からブロックされてしまい。深い海の底に沈むような青春時代を過ごしていたことだろう。

ボタン一つで簡単に「愛している」ということもできる。

けれども、そこにリアルな痛みが伴わないならば、信じる人間がいるなんてとても思えない。

Mr.Childrenさんの歌詞を引用するならば、「左脳に書いた手紙」。

そんな手紙や小説が相手の心に響くとは思えない。

それならば、いつそのこと、僕と好きな人にしかわからない暗号でいい。

初期のポケベルくらい曖昧になれたら良いよな。

曖昧なんだけど伝わる人にはちゃんとストレートに伝わる。

左脳に書いた手紙は、ぐちゃぐちゃに丸めて捨てた。後悔はしないさ。

本当の恋愛ならば、行動と結果で示す。

それが、ポケベル世代の恋愛観かな。

「424」

「0848」

宇宙に送った「愛してる」のサイン。

キミに届け。

小説家 橋本昂祈

思春期の蒼さ

漫画やアニメは、親たちの世代はバカにするかもしれないが、今や日本の最強コンテンツになった。

アニメが約3兆8704億円。漫画は、約6925億円。

市場規模を誇っているらしい。

ちなみに、僕は経済にかなり疎い人間だが、大人気小説家の石田衣良さんのYouTubeチャンネルの真似をして数字を出してみた。

もっと言えば、石田衣良さん流のエッセイの書き方やアイデアの出し方などを参考にして記事を書きます。

今日のエッセイでは僕の体験談を通して、自分から世界はどのように見えているのか？ を意識して書いてみます。

(石田衣良さんのYouTube面白いっすよ。)

レッツゴー！

(古っ。笑)

僕は、思春期に5年間ほど引きこもり生活を送っていたことは皆さまもご存知の通りです。

よく頂くご意見の一つに、そもそも、コンビニとか友達の家とか遊びに行ったり外出してるじゃん？ っ
て言われます。

厚生労働省における「引きこもり」の基本的な定義とは、仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせず、6ヶ月以上続けて自宅に引きこもっている状態のことを指すようです。

「引きこもり」と言っても色んなパターンや考え方があっていいですね。

厚生労働省の定義によると、僕はガチな引きこもり状態ではなかったことになりました。

ただ、引きこもりという言葉がニュースなどで広く知れ渡るようになった時代に、引きこもりの若者とはまさに僕のことだという自覚はありました。

実際のところ、引きこもりとは言えなかったかもしれませんが、その後、ちゃんと心療内科にかかって「思春期特有の視線恐怖障害」という診断を受けました。

引きこもり特有の神経症的な辛い時期を経験したのは事実なので、多少の言葉の過ちはお許し頂けたら嬉しいです。

僕の世界観では間違いなく思春期の自分は、引きこもりでした。

もともと僕は、被害妄想も強めな人間です。

例えば、学校の教室内で机に顔を埋めて寝てるときに、「うもん。マジ、チョコベリバ！」みたいな暗号が聴こえたら、それは僕に対しての悪口であると捉えます。

名前が右文だから「うもん」とゆゝのは僕のニックネームだし、マジってのは「真剣」と書いてマジだし、「チョコベリバ」ってのは、超ベリバッドを略した言葉です。

すなわち「橋本。マジ、ムカつくー！」みたいな意味に翻訳することができます。

（世界一解りやすい90年代ギャル講座）

というよりも、

ここまでくるともはや暗号になってないから！ 笑

けれども、彼女たちを恨むような気持ちはないのです。ひょっとしたら、彼女らをエッチな目でみちゃったから嫌われたかな？ くらいの感覚です。

まあでも、あの頃はノイローゼのような感じだったし、高校をリタイアして休養してなかったら、今頃は生きてないかもって思う。だから、今では逆に、いじめてくれてありがとうって感謝してますよ。

なんかオレにも相手をムカつかせるだけの落ち度はあったでしょう。

嫌いの反対は、好き。

むしろ、僕はギャルという生き物が好きだったかもしれないよね。

あんまり綺麗事いうとまた嫌われるかもだけど。

最後は、高校の正門から逃げるような気持ちでさ。

はや足で駆けたあの街並みを今でも鮮明に思い出せるよ。

こんなにも、残酷なすれ違いを神さまは与え続けたが、僕の世界は虹色にみえていたよ。

入学式とオリエンテーションに参加してさ。

3日目には、決心した。

「よし！ オレは漫画家になる」と。

蒲田の本屋さんでさ、親族から頂いた貴重な入学祝い金を大切に御財布にいれてさ、高橋留美子イラスト大全みたいな書籍を買った。

高校の友達も付き合ってくれてさ。

「短い付き合いだったけど、元気だな」

みたいなことを僕が言えば

友人は明るくてクールなキャラだから

「地元でまた会えるだろう。またな」

みたいなセリフ残して歩いて行った。あいつ背中越しに手を振っていたよな。

もし漫画に書くような事があれば、重要なキャラクターとして登場させてやるからなって誓った。

それからしばらくは、幸せだったな。

自宅から少し離れた場所に、あまり人気のないコンビニ店があったのだけど、高校の友達を家まで送った後にさ、その時に下調べしてあったのさ。

【アルバイト募集】って張り紙をみた瞬間に、ピーんって閃いた。

「ここでアルバイトしよう！」って。

電話するよりも、はやくアルバイトする意思を伝えたくて、僕はそのまま入店した。

ショートボブカットのような艶やかな黒髪の美しい小柄な女性がひとり働いていた。ネームプレートには【マネージャー】と印字されていた。

「すみません。アルバイトってまだ募集してますか？」

僕が訊ねる。

すると、小動物みたいな瞳をウィンクするようなイタズラな目つきをして女性は言った。

「ひょっとして。ここでアルバイトしたいの？」

歳上の女性に憧れていた思春期のこの心を見透かしたかのように女性はいう。彼女は綺麗だ。

「あ、はい。外の張り紙みてきました」

僕は緊張して言った。会話になってなかったかもしれない。だが、気にする様子もなく女性は続けた。

「今日はいにくだけど店長がいないのよ。もし良ければ、お名前と電話番号を教えてください。明日以降に電話させるから」

僕がメモ帳を取り出すより先に、女性が胸ポケットからペンを取り出した。

「きみの名前は？」

…そうして後日。

店長さんとの面接を終えて、僕のフリーター生活は始まった。

アルバイト生活は、4日目にして父親からの妨害(?)にあい大工見習いをする羽目になってしまった。

コンビニのマネージャーのことを好きだったのだろうか。僕はよく思い出せない。思い出ばなしを美化してるだけかもしれない。

大工見習いのお仕事の帰り道に、必ず、僕が働いていたコンビニの前を通る羽目になった。

辞めてから数日は、マネージャーも機嫌が良かったが、あんまりにも毎日のようにコンビニに立ち寄るので「何か用？ 忙しいんだけど」みたいな強い口調で言われた。その時はじめてコンビニのアルバイトからは完全に卒業できた気がする。

「どうすれば漫画家になれるだろうか？」

夢の掴み方すら知らぬ。引きこもりがちな少年が観た景色は、あんなにも鮮やかなブルーに彩られて。

導かれるように地元の文房具店で「丸ペン、カブラペン、インク」を購入した。

漫画家になる夢は、面白いキャラや世界観、ユニークなストーリーがつかれずに終わった。

その次は、「エヴァンゲリオン」というアニメにはまりイラストレーターになりたい、と。

そして僕の夢は、脳内に広がる無限世界をころころと転がり続けてエレキギターに着地した。

どうせ夢を見るならば、ありえないくらいデッカい夢を観たい！！

世界一のギタリストを目指しながらも、周囲の人間に引っ張られてボランティア活動に邁進する日々。

あの頃の蒼さ。

獅子座流星群を眺めていた。

福島県いわき市の海岸沿いにて、親友とタバコ吹かしながら、ゆっくりと語りあう。

星の名前には詳しくない。

そんなロマンティストでもない。

ただ、現実世界ではうまく生きれない…

若き男たちの心の叫び！

夢を諦めるのは簡単だ。

けど

「アイツならなんていうかな？」

そんな小さな約束ごとに
僕たちは最大のロマンを感じていた。

缶コーヒーとタバコ。

ヤニまみれの夢を抱えてたあの頃。

「夢はすててはいけない」

あのメロディを合図に。

また、会えるように。

小説家 橋本昂祈

第二部 僕を創った人たち

レバニラ定食

正直に告白すると、子どもの頃はレバニラが何よりも苦手でした。

他にも、野菜炒めに入っていた人参やピーマン、キャベツなどが苦手でした。後は、里芋やブロッコリーなんかも食べず嫌いをしてましたよ。

僕と違って、兄や姉が健やかにすくすく育ったのは、よく食べてよく喋りよく笑っていたからだと思ってる。

僕は、和食の王道の納豆も食べれないような偏食の多い可哀想な少年だったかもしれない。

今と違って昔の野菜は、青くさかったと思うし、ひどい時は泥を食べてるような感覚があった。

(逆に、それを美味しいという人もいるが)

結果的に、もやしと卵の炒め物やお肉しか食べられなかった。もやしっ子とは、太陽にあたらぬひ弱で虚弱体質な子どものことらしいが、僕のことを一言で説明するに充分だ。

まあ、あまり太陽に当たらないの言い過ぎかもしれないが、下手をしたら、夏休みにどこも出かけなかったような年もあったから。

9月の登校日に久しぶりに学校へ行ったら、みんなは黒々と日焼けしてるとゆゝのに、僕ひとりだけ真っ白な肌だった。ゆえに、女子たちからけっこうイジられましたよ。

ちなみに、身長は常にクラスで1番か2番目に低い。

みんなの前で研究発表する時なんかは、顔が真っ青だったはず。脈が異常に速いことが自分でもわかった。

あまりにも喋らなさ過ぎるから周囲の大人たちから心配されたほどである。

ちなみに、プールも大の苦手だった。

少年の頃は虚弱体質で、よく風邪などを引いて熱を出していた。だが、親の心配をよそに夏だけはプー

ルが休めるので幸運に感じていた。

だからと言って、聞き分けの悪い子どもだったのか？ と言えば、実は、めちゃくちゃ素直な子どもだった。つい他人を信用し過ぎてしまう。

たぶん、発達障害のはしりであろうか。

小説家はほぼ全員、発達障害を持っているとは言われているが、僕も例外ではない。

幼い頃から家族や友人とあまりお喋りしてこなかったため、語彙量もあまり増えず、学校の成績はオール3みみたいな子どもだった。

しかしながら、なぜか周囲にはいつも友達がいて、ピンチには必ず助けてくれた。

客観的に振り返っても、理由はわからないが、おそらくは、性格がめちゃ真面目で素直に人の言うことをきく少年だったから可愛くみえたのだろうか。

赤ちゃんは無条件に可愛いという心理が働いていただろうか。

三つ子の魂百まで。

恐るべき古来日本人の知恵。

まあ、不幸中の幸いだったのは運動神経だけは悪くなかったことだろう。

スポーツをしている時は喋らなくて済む。

非言語コミュニケーション、ボディランゲージと多少の質問力さえあれば、意外と友達はできるものがある。

（基本的に人は聞いて欲しい生き物らしいよ）

とまあ、レバナニラからだいぶ脱線したのでそろそろ回収していこうと思う。

案の定、偏食がたたって中学一年生の頃に、貧血になってしまった。

この貧血という病気も風邪などと同様に、地味にめっちゃくちゃ辛い。

なぜ僕が女性の気持ちに寄り添って考えることができたのかと言えば、常に倒れそうなほど血が足りなかった少年だったからだ。女性だって女の子の日は血がたりなくて大変だろう。気持ちは理解できる気がしたのだ。貧血は辛い。

お医者様からは、はっきり言われた。

「赤血球が全然足りてません。レバーを積極的に食べてください」

僕はレバーが大の苦手だったため絶望感に沈んだ。

当時スーパーなどで売っていた生レバーというのは、少しでも処理方法を間違えると食べれたようなものではなかった。まるで砂鉄そのものを食べてるような嫌な味がした。みんな一度は、あやまって鉄棒を舐めた経験があると思うが、まさにあの味である。

中学一年生の頃には、病院も一人で行けないような世間知らずの少年だった。そのため、母親がお仕事を早退して付き合ってくれた。

いつだったか。具体的には忘れたが、たまたま病院で学校の友人に遭遇したことがあって、たいていの友人は親の付き添いなしで病院に来れることにすぐ気づいた。なので、僕も母親に「次からは一人で大丈夫だから」と説得した。散々うったえて、ようやく単身での通院が許可された。それくらい、僕は母親からは甘やかされて育ったのだ。

単身で通院するより以前のこと。母親が中華屋さん連れて行ってくれた。理由は、自分でもわかってる。成長の遅い僕が【レバニラ定食】を食べる時がきたのだ。

入店すると母は迷わずレバニラ定食とチャーハンを注文した。おそらくチャーハンは母が食べるのだろう。

まずは、母のチャーハンがテーブルに着丼し、いよいよ僕のレバニラ定食がテーブルに運ばれてきた。

悪いくせだが、料理が運ばれたらまず匂いを嗅いでしまう。母いわく「変な匂いしなければ大丈夫」という教えを忠実に守った結果だ。

香り自体はいつも美味しそうな匂いがする。食欲をそそるあのレバニラの香ばしいにおい。意を決して口に運ぶ。

「どう？ 美味しいでしょう？」

母の質問に対して軽くうなづく。

（あれ？ 超うまくな？）

はじめて本格的な中華屋さんで食べた【レバニラ定食】は、想像以上に美味しかった。

けれども、もともと食が細いので半分くらい残してしまった。

中華屋さんには、4、5回連れて行ってもらった後に、「毎回、半分も残していると悪い」との理由で、母が店のおじさんにレシピを聞いてくれた。そして、ようやく家でも本格的なレバニラが食べれるようになったのだ。最後は母の執念が勝った。それから毎晩のように食卓にはレバニラ炒めが出された。僕だけの特別メニューだったと思う。そのおかげで貧血を克服することができた。

まあ、少年だった頃は、母親の愛を重く感じることも多かった。たくさん心配をかけて、現在もまだ心配をかけ続けている。けれども、それを親不孝しているとか責任を感じるのはやめようと思う。

成長の遅い僕でも、現在では、よく食べよく喋りよく笑う。それが何よりの親孝行と知ったからだ。

もっとも、慶應通信にチャレンジしてるのも、半分くらいは親孝行したいからだ。はじめて僕に文章を書く楽しさを教えてくれたのは他ならぬ両親だ。

あの頃、母の執念のレバニラが作ってくれた熱い血潮は、今、僕の体中を駆け巡り、物語を紡ぐエネルギーになっている。

文章を書くことが何より楽しい。

もっとたくさん本を読んでパワーアップしたい。

「橋本右文」

由来は、文学において右に出る者なし。

どこまで行けるかわからないが
名前負けしないような生き方をしていきたい。

あの時、母親のレバニラでつくられたはずの
「若き血」を燃やして。

小説家 橋本昂祈

蒲田中学卓球部

サッカーW杯2026が始まったばかりの今日この頃、いかがお過ごしですか。

僕も昔は、サッカー少年でした。

小学生の頃は、ソフトボールチームに所属してましたが、本当はサッカーの方が好きでした。

きっかけは、アルゼンチン代表のマラドーナ選手のサイン入りサッカーボールを母親の友人から頂いたことに遡ります。

ミロという粉ココアみたいな飲み物あるじゃないですか。そのキャンペーンにてサッカーボールが当たったらしいのだが、母の友人のお子様は女の子しかおらず、サッカーに興味がなかったために、マラドーナのサイン入りサッカーボールは、僕のもとへとやってきた。

まあ、ここまで書いておいてなんですが、今日は卓球の話しをします。

タイトルにも書きましたが、僕は蒲田中学卓球部に所属していました。

そして、補足しておきますが、僕が蒲田中学校に通っていたことは声高には言えない秘密でした。

なぜなのかと言えば、その昔、遠い先輩たちの代では、蒲田中学校といえば、完全なる「不良校」だったからなのです。

現代では、マイルドヤンキーっているじゃないですか。僕たちの代のヤンキーは、ガチャンキーとマイルドヤンキーの中間くらいの立ち位置とイメージしてくれば良いかと。

ここでは書けないような、中学生同士の殴りあいのケンカなんかもしてみたいですが、ニーズがあるとは思えないので、今日は卓球の話をしませう。

念のためさらに補足しておきますが、昔は東大よりも格上とされていた名門都立高校である日比谷高校にも数えきれないほど卒業生を送りだしたカオスな中学校です。

全く関係ないですが、中学生だった僕にはじめてお酒の美味しさを教えてくれたのは、実は日比谷高校に受かった友人です。お酒やタバコと学力は全く関係ないのだと知った瞬間でした。

そんな秀才である日比谷くん（仮名）と僕は、なんと同じ部活動をしていたのです。

勘の良い方ならば、気づいたと思います。

そうです！

帰宅部です。笑

僕は中学一年生の頃に貧血になってしまいサッカー部を辞めました。正確に言えば、辞めてはいけど幽霊部員として籍だけは残った状態のまま、学校を早退しては病院通いの日々を送っていました。

ですので、帰宅部です。

一方で、日比谷くんは地頭が良すぎるせいで人生を悟ってしまいエロスや酒に目覚めたようです。

他にも、どのような部活にも属せない帰宅部の連中を集めて仲良く遊びながら学園生活をエンジョイしていました。

そんな訳ありの面々でも、中学3年生になると内申書という謎の通信簿におびえることになります。

「おい。そろそろ受験じゃね？」

「そうだな」

「なんか部活しなきゃマズくね？」

「なんで??」

「お前、内申書って知らねえの？」

「内申書??」

「ああ。セン公が高校に提出するアレだよ」

「マジ。やってらんねーよな。サラリーマンなんかなるつもりねえよ、オレ」

「お前らしいな。将来はどうやって食べてくつもりだ？」

「ん？ DJかダンサーだな。笑」

中学3年生になってから帰宅部界限ではこのような会話のやり取りが行われており、サラリーマンになるつもりもなかった僕ですら内申書のために部活動をやる羽目になりました。

「んじゃあさ！ 稲中卓球部にかけてオレらも卓球やろーか？」

「お！ いいじゃん！ さっそくみんなに布教してまわろうぜー！」

「行け！ 稲中卓球部」とは、当時流行っていた人気ギャグ漫画のことです。真面目に卓球をしようとする主人公の竹田を僕らのような遊び人タイプの人間たちが足を引っ張るといふ青春ギャグ漫画です。

スクールカーストについては、あんまり触れられたくない事柄ですが、僕たち蒲田中学卓球部の面々もともとが帰宅部出身なので、スクールカーストの2軍か3軍の寄せ集めってことになりますか。

兎にも角にも「申年生まれ」の僕たちは、人気者になりたい願望が人一倍強い。（ように感じる。笑）

サッカー部やバスケ部のレギュラーになれなかった苦い経験を通じて、それならば、遊び人レベル99を極めてやろう！ みたいなノリで卓球部に入部しました。

ちなみに、部長は2年生。めちゃ迷惑そうに僕たちをみえた。いちおう僕たちが先輩だから、卓球台のセッティングや片付けは後輩くんたちが勝手にやってくれました。後から入ってきた先輩がトータル10名以上。僕が逆の立場なら部活辞めてるよね。この場をお借りして、ありがとうございますと言いたいです。

ギャグ漫画みたいに女子部員がいれば華やかだったかもしれませんが、実際には、フツーに卓球して楽しんでましたよね。

アフターには、お好み焼きを食べに行ったり、ステーキ丼のダブル（肉2倍増し。推定400g）にチャレンジしたり、カラオケ行ったり。

繁華街近くにある学校の中学生なんて、邪念のかたまり。お酒やタバコも自動販売機で買えるし、ほぼ無法地帯でした。だから、偏差値50弱とはいえ、よく高校進学できたよなって感心します。日比谷くんなんて平均偏差値72以上ですから。

逆に、勉強のし過ぎか。はたまた、親が金持ちだからつい美味しいものを食べ過ぎてしまったのか。若くして亡くなってしまった同級生がいます。

こんななるくらいなら、うちらと一緒に卓球でもして汗流してさ。放課後は、カラオケでも連れてってあげたかった。連れてってあげたかったって言うとお上から目線に感じるかもだけど、何のために勉強

を頑張ってきたんだよってやるせない気持ちになる。

僕は、または、オレたちは親から言われたから勉強してるんじゃない。

ましてや学校の先生の言うことなんか全て信じてる訳ない。100%信じてたら帰宅部はやってない。

先輩たちをみてみよう。

先生たちから理不尽な事を言われながらも、真面目にコツコツ勉強頑張って社会的に偉くなった人もいれば、先生に逆らって学校を退学になっても野武士みたいにくましく生きてる先輩もいる。

どっちが正解なんてないよ。

例えば、東大を卒業するような超エリートでも、人の気持ちを何一つ理解できなきゃ人間としての落ちこぼれだと思っしな。

そんなエリート主義の世の中に対して、NOを突きつけたのは遠い昔。

今では、真面目に慶應義塾大学通信教育課程での卒業を目論んでいる、僕がいる。

学歴が欲しい訳じゃない。

うまく言葉にはできないが、人間の可能性を信じたい気持ちが強いの。

あんなにも学生時代に遊びほうけていた僕が、大人になり、学問や小説世界でどこまで行けるのかを試したい。

そして、辛い時こそ笑顔を忘れたくない。

僕たち蒲田中学卓球部はさ、確かに弱小なチームだったと思う。大会にも出場してないしな。

偏差値教育の呪いにかけてられて、友達ですら出し抜いてやろうみたいなお上様の罠にかかっていた。

あの多目的ホールにてひたすら白球をラリーしながら、汗を流した日々。

僕たちは卓球をしながらも、いちばん学んだのはそこじゃない。オレたちは仲間とのコミュニケーションを学んでいたのだ。

受験勉強なんか本音言えばやりたくない。けど、馬鹿な奴にバカにされるのはもっと嫌だ。

いちばん辛い時に、側にいてくれた仲間たち。

おまえたちは、最高の友達だよ。自慢の友達。

卒業アルバムの記念撮影はみんなで変顔したよな。

みんなわざと不細工な表情してたけど最高の笑顔だった。あんな笑顔は二度ないよ。

まさか、卓球がこんなに人気スポーツになるなんて、あの頃は予想してなかったよな。

また、いつか笑顔で再会できる日まで。

生きて生きて生ききろう。

人生ギブ&am p. テイクじゃなくて。

与えて与えて与えまくった奴が、最後は勝者だ！

小説家 橋本昂祈

第三部 グラードションの世界へ

はじめてビーズに触れた日

僕は昔からキラキラとした物が大好きである。

パワーストーンのお仕事をしていた時には、豊富な種類の天然石に囲まれて幸せだった。

はじめて、宝石やビーズにときめいた瞬間の出来事を未だに思い出せる。

蒲田には、ユザワヤという手芸用品店がある。

ちなみに、僕が生まれる前からユザワヤはあった。地元民にとっては「ちょっと西口まで散歩がてらに文房具を見に行く」みたいな感覚なのだが、わざわざ電車に乗って遊びに来られる方も多いようだ。

小学生の頃、家庭科の授業で課題がだされた。

「来週はビーズアクセサリーをつくります。みんなは地元が蒲田だからユザワヤがあって良かったね」

家庭科の先生が言う。

「予算は、トータルで1000円くらい。できるだけ友達同士で集まって行ってね」

先生は言って、家庭科の授業は終了した。

放課後、仲の良い男子4人くらい集まって作戦会議をする。

「じゃあ、親に金貰っていつものところに集合ね」

リーダー的な友人が言って解散した。

約束の時間は、6時。

いつもより早めに集合場所へ行く。すでに、みんな喋りながら待っていた。

歩くこと5分でユザワヤに到着。ビーズ売り場の2階へと登る。香水が混じりあった薫りがしていた。フロアに出た瞬間。

「うわぁ〜」

思わず感嘆の声が出た。

フロア中央にはウッドテーブル。色とりどりのビーズが綺麗に並べられている。

白、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫、黒

他にも、知らない色がいっぱい。

絵の具は、石を砕いてできるそうだが、こんなにも美しい色の世界があったとは知らなかった。

その中でも

エメラルドグリーンに心奪われた。緑と青の織りなすグラデーション。一つ手にとってみる。

光にかざす。虹のようなスペクトラム。それはまるで愛の女神ヴィーナス。意識が昇天してしまいそうなほどだ。

「ハシ？ どうした？ 具合悪いの??」

友人が僕に問いかける。

「オレ。ここに住みてえ…」

はじめて天然ビーズをみた正直な感想である。

あれから長い時間が経ち、僕はパワーストーンの仕事を経験し、今は「言葉」を紡ぐ小説家になった。

ビーズの色が、赤、青、緑と無限にグラデーションを描いていたように。

人の心や感情も、決して一色ではなく、光の当たり方でいくらでも表情を変える。

あの日、ユザワヤの2階で僕の心を奪ったエメラルドグリーンのように。

誰かの心に虹をかけられるような、美しくてきらきらした「言葉のビーズ」を、これからも紡ぎ続けていきたいと思う。

小説家 橋本昴祈

泣きぼくろ

泣きぼくろがあると一生泣き続ける人生になる。

小学生の頃に流行った占いによると、泣きぼくろは不吉な象徴として語られていた。

僕には、右目下の中央に泣きぼくろがある。そして、左頬のほくろも泣きぼくろにカウントするなら二つも持っていることになる。

話しは脱線するが「こっくりさん」や「黒魔術」なども小学生の頃に流行った。少しニュアンスは違うが「心靈写真」などの本を収集してる友人もいた。

「こっくりさん」とは、狐の神を呼び出し、質問に答えてもらう降霊術の一種である。「黒魔術」とは、簡単に言えば「呪いの呪文」。

今から思えば、にわかには信じがたい現象だが、小学生とは好奇心の塊のような生き物である。例にはもれず、僕たちの友人の中にも奇妙な世界が大好きな女子がいて、放課後に集まっては狐の神様を降臨させていた。

現代のスピリチュアルの世界では、基本的には、幸せになるためにある気がしているが、とにかく昭和の時代には、コンプライアンスなんかないから、大人たちの影響を受けて僕たちもやりたい放題だった気がする。

さて、冒頭で述べた泣きぼくろについてだが。

小学生の頃は信じてなかったような気がするが、その後、中学一年生で貧血になったり、高校進学してすぐ中退したりした不運が続いたために、迷信とは思えなくなった。

15歳で引きこもり生活がはじめてからは、僕の世界は灰色にみえていた。

仏教では、一口に幸せと言っても「生命状態」のことを指すと教えている。一日の中でも「生命状態」はコロコロ変わる。幸せは、その人の置かれた「ステージ」や「考え方」に由来するところが大きい。

泣きぼくろが示すように、僕は人一倍、繊細な感性を持っていたのだろう。

思春期の頃には、人前で「泣くこと」はみっともなくダサイことだと思っていた。ゆえに強がって、あえてスリリングな生き方を求めたり、平気で他者を傷つける言葉を吐いたりした。僕は見栄やプライドの塊だったのだ。

引きこもりの部屋で、僕は一人でたくさん泣いた。泣きぼくろの呪い通り、一生分の涙を流したかもしれない。

だが、長い時間を経て、僕は「泣ける自分」を許せるようになった。

悲しい時には泣き、美しい景色を見て心を震わせる。見栄やプライドで武装するよりも自分の弱さを認めて涙を流せる大人のほうが、よっぽどタフでカッコいいと知ったからだ。

今、鏡に映る自分の右目の下にある小さな点を見て僕は少しだけ笑う。

「一生泣き続ける人生」も、悪くない。

それはきっと、一生心が動き続ける、彩り豊かな人生ということなのだから。

小説家 橋本昂祈

ファーストクラス

人生で一度だけ、ファーストクラスに乗ったことがある。羽田から沖縄。最後の家族旅行だった。

父親からも「これが最後の家族旅行だからな」と念をおされていた。僕が小学3年生頃の話である。

あんまり記憶に定かではないが、入院中の沖縄のおばあに会いに行く目的だったはずだ。

橋本家は、貧乏とは言わないけどめちゃ金持ちって訳ではないし、中流の中を地で行くような庶民の家系だと思っていた。

つまり、なぜファーストクラスに乗れたのかは長年の謎だった。

なにはともあれ。

赤子だったとき以来の飛行機体験は、耳がキンッととして、それだけでビビりの僕は飛行機が落ちて死ぬかもしれないと不安にかられた。天性の心配症なのだ。

ファーストクラスといえども、羽田那覇の短時間のフライトでは機内食も出ないし、何がどう違うのかは幼い僕にはわからなかった。

ちなみに、AIに調べてもらったが、当時のANAにはファーストクラスという名称ではなく、スーパーシートという名で販売されていたようだ。

正規料金に、プラス7000円でスーパーシートに乗れるらしい。(片道7000円)

羽田那覇は、スーパーシートだと往復74000円からになる。(一人)

ざっくり換算して、5人家族だから、約37万円から学生割引を差し引いた概算になる。

いちトラックドライバーの父親がフライト料金だけで約37万円もだしたとは考えにくい。

宿泊先は、母のおねえ様のご自宅にお世話になってたから計算に入れないとしても妙である。

いったいどこからそんな大金が出てくるのか。

謎は迷宮入りしかけたと思えた。

しかしながら、答えは母親が白状した。

「お嫁に出る前までは、まさか、お金の心配をするとは思わなかった」

母親はポロリという。

つまりは、母親の実家は裕福な家系なのだ。

長年の謎を確かめるために、僕は何度も母親の故郷や生家を訪ねた。

東京都大田区蒲田生まれの僕からすると、何もない田舎にしか思えないのだが。

母親の生まれ故郷、沖縄県浦添市伊祖という土地柄は、琉球王族に仕えた名家が立ち並ぶ。世田谷区と文京区と鎌倉をミックスさせて南国の風を吹かせたような土地とでも言えよう。伊祖のあたりは高台になっていて手付かずの豊かな自然や森林が残されている。

現在、沖縄の地価は上昇を続けており、浦添市は県内で3位になる。浦添市の中で伊祖は人気のエリアのようである。

なるほど。

母親の家系は代々、沖縄に土地を持っているのか。

ならば、僕だって人生で一回くらいはファーストクラスに乗る権利はありそうだ。

それはさておき。そんな高貴な土地で育った母が、蒲田のトラックドライバーの元へ嫁いだ。

僕の体の中には、琉球王朝にゆかりある名家の静かで高貴な血と、蒲田の喧騒と排気ガスの匂いがする泥臭い血が、半分ずつ流れていることになる。

どちらの血も、僕にとっては誇りだ。

僕は今、小説家として物語を紡いでいる。

家柄やお金で手に入れた「スーパースーツ」ではなく、自分自身が叩き出した言葉の力で、いつか必ず自力でファーストクラスのチケットを手に入れてみせる。

そしてその時は、僕にとって一番大切な人を隣に乗せて、雲の上の景色を見せてやりたい。

あの日の親父が、僕たち家族に見せてくれたように。

小説家 橋本昂析

あとがき

あとがき

本書を最後まで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

誤解を恐れずに言わせてもらおうと、この『思春期の蒼さ』は、とある一人の女性に読んで欲しくて書いたエッセイです。その女性は現在、ロンドンに13日ほどステイした後、パリにいるようです。ロンドンやパリと日本の時差は約7、8時間になります。パリの石畳の街並みの中、颯爽と歩く姿が目には浮かびます。ぜひ、歩き疲れたらエスプレッソでも飲みながら気軽に読んで欲しいです。そして少しでも、何かしらの気づきになればとの思いを込めました。なにはともあれ、健康と無事故をお祈り申し上げます。チャレンジする勇気を下さりありがとうございます。

たった一度しかない人生における『輝ける瞬間』を切り抜いたエッセイたち。そのどれもが今となれば黄金色の思い出。あの頃の痛みや苦しみを懐かしく感じながら楽しんで執筆しました。あなたにとって一つでもお気に入りのエピソードがあれば嬉しいですよ。

昨今では、人生の応援歌的な歌や小説に溢れています。僕も少なからず、そのようなエンタメに影響を受けたかもしれません。ゆえに、メッセージ性の強いエッセイ集になりました。僕はいちおう仏教徒です。ですので大目に見て頂けると幸いです。

今回、思春期をテーマに7篇ほど書かせて頂きました。おそらくは、何年後かの自分にとっていちばんの宝物になる予感がしています。未来のために埋めたタイムカプセル。その頃には、プロの小説家として執筆活動と慶應通信での学びを両立させながら、直木賞の候補になれるくらい活躍しているといいな。(笑)

このエッセイ集を

永遠の15歳のキミへ贈ります。

苦楽ともに合わせて

笑顔で生きていきましょう。

2026年6月19日 橋本昂祈

思春期の蒼さ

著 者 橋本 昂祈

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
